〈『玉葉和歌集』巻十五、雑歌二、二〇七三〉

〈詞書〉

「野宮より退下の後雪をみて」〈『新葉和歌集』巻才九、神祇歌、五七四〉

96おもふともいはでほどへん月日には心のくまもあらじとぞ思ふ

談天門院（藤原忠子）

〈詞書〉

「皇后宮、斎宮と申しける時、たてまつられける」

〈『続千載和歌集』巻才十七、雑歌中、一八五五〉

97我があとも人のしるべとなりにけりまづわけそむるのべの白雪

前斎宮節折（よおり）

〈詞書〉

「題しらず」

〈『続現葉和歌集』巻才六、冬歌、五二六〉

98九重のむかしがたりもかなしきにほひなそへそ軒のたち花

懽子内親王

〈詞書〉

「題しらず」

〈『新千載和歌集』巻十六、雑上、一七四六〉

99わかれつる袖にかけけりすずか川やそせの瀧におつるしら玉

後村上院御製

〈詞書〉

「斎宮群行の心をよませ給ける」〈『新葉和歌集』巻才七、離別歌、五〇九〉

100忘れめや神のいがきの榊葉にゆふかけそへし雪の曙

祥子内親王

〈詞書〉
「伊勢におはしましける時、女郎花をうゑられたりけるに、京へ返りのぼりたまふとて」
〈『新続古今和歌集』巻才九、離別歌、九一三〉

88 けふもまたかへるみそらのゆふだすき有りしなごりのなほのこるらん　雅経

〈詞書〉
「五月五日、本院へまゐりて、女房越前をたづねて対面してややひさしくありていでけるに、忠信卿春宮権亮の扇をとりて硯をめしてたびたれば、かきつけ侍る」
〈『明日香井和歌集』一六四四〉

89 おもふことなきだにやすくそむくよにあはれすててもをしからぬ身を　（禮子内親王）嘉陽門院越前

〈詞書〉
「千五百番歌合に」　〈『続古今和歌集』巻才十九、雑歌下、一八二二〉

90 行末も照すひかりの長月につげのをぐしはさしはなれにき　順徳天皇御製

〈詞書〉
「斎宮群行事を思ひいでて」　〈『紫禁和歌集』一〇三四〉

91 神風やいすずかは浪かずしらずすむべきみよに又かへりこん　春宮権大夫公継

「公継卿、勅使にて太神宮にまうでて、かへりのぼり侍りけるに、斎宮の女房の中より申しおくりけるに」の詞書をもつ「読人しらず」の「うれしさもあはれもいかにこたへまし古郷人に問はれましかば」の「返し」がこの歌
〈『新古今和歌集』巻才十九、神祇歌、一八七四〉

92 みやこいでてやそせわたりしすずかがはむかしになれどわすれはやする　（利子内親王）式乾門院御匣

〈詞書〉
「式乾門院斎宮にて伊勢にくだりたまうける時をおもひいでてよみ侍りける」
〈『続古今和歌集』巻才十羈旅歌　九〇一〉

93 別るともたちもはなれじひとしれずそふるおもひのけぶりばかりは　（綜子内親王）月華門院

〈詞書〉
「文永元年九月斎宮の群行のとき、たき物たてまつるとて」
〈『続古今和歌集』巻才九、離別歌、八四〇〉

94 なれきてもわかるるみちのたびごろもつゆよりほかにそでやぬれなん　権中納言長雅

〈詞書〉
「おなじ群行の長奉送使にてまかりくだりて、かへりまうしのあかつき、女房の中へつかはし侍りける」
〈『続古今和歌集』巻才九、離別歌、八四一〉

95 すずか川やそせの波はわけもせでわたらぬ袖のぬるる比かな　奨子内親王

〈詞書〉
「延慶元年八月野宮よりいでたまふとて」

〈詞書〉
「おほゐのみかどの斎院、いまだ本院におはしましし比、かの宮の中将のきみのもとより、みかきのうちの花とて、をりてたびて」
〈『建礼門院右京大夫集』七三〉

80しめのほかも花としいはん花はみな神にまかせてちらさずもがな　建礼門院右京大夫（平徳子）

79の「かへし」
〈『建礼門院右京大夫集』七四〉

81わすれめやあふひを草にひきむすびかりねののべの露の曙　式子内親王

〈詞書〉
「斎院に侍りける時、神だちにて」
〈『新古今和歌集』巻才三、夏歌、一八二〉

82いく千代とかぎらぬ君がみよなれば猶をしまるる今朝のあけぼの　左衛門督家通

「左衛門督家通、中将に侍りける時、祭の使にてかむだちにとまりて侍りける暁、斎院の女房の中よりつかはしける」の詞書をもつ「読人しらず」の「たち出づるなごりあり明の月影にいとどかたらふ時鳥かな」の「返し」がこの歌
〈『新古今和歌集』巻才十六、雑歌上、一四八七〉

83やへざくらをりしる人のなかりせばみし世のはるにいかであはまし　藤原良経

「前斎院大炊御門におましましけるころ、女房の中よりやへざくらにつけて」の詞書をもつ斎院の女房の「ふるさとのはるをわすれぬやへざくらこれや見しよにかはらざるらむ」の「返し」がこの歌
〈『秋篠月清集』一〇四二〉

84月さゆるつもりのうらのみづがきはふりしくゆきにいろもかはらず　前斎宮大輔

「住吉社歌合嘉応二年十月九日　題　社頭月　十七番　左持」
〈『住吉社歌合嘉応二年』三三〉

85いつかまたいつきの宮のいつかれてしめのみうちにちりをはらはん　西行

〈詞書〉
「伊せに斎王おはしまさで、としへにけり、斎宮、こだちばかりさかと見えて、ついかきもなきやうになりたりけるを見て」
〈『山家集』下、雑、一二二六〉

86いとどしく神をぞ頼むあふひ草おもひかけつるしるしあらせよ　賀茂成助

〈詞書〉
「まつりのかへさの日、いつき殿にまゐりたりければ、をかしげなるはしたものをこれみよとていだされて侍りければ、かへりてあふひにかきて女につかはしける」
〈『月詣和歌集』巻才七、雑上、七二四〉

87うゑおきて花の宮こへかへりなばこひしかるべき女郎花かな　粛子内親王

たまひける御ともにて、女房のもとにつかはしける」

〈『千載和歌集』巻才十六、雑歌上、九七二〉

藤原俊成

72おく霜も君がためにと心してさかりひさしき宿の村菊

〈詞書〉

「故左のおとどの仁和寺の徳大寺の堂に、上西門院前斎院と申しし時の女房、あまたわたりて歌どもよみおかりたりけるを、後に見出てて、その返しせよとて、大炊御門の右大臣右大将の時のありしかば、かきそへつつ、つかはしける歌に」

〈『長秋詠藻』三七四〉

兵衛

73もろかづらかかるためしはあらじかしけふ二葉なる千代をそふれば

〈詞書〉

「上西門院いつきときこえたまひける時、待賢門院かんだちにわたらせたまひけるに御ともにさぶらひて斎院の女房の中にあふひにつけてつかはしける」

〈『新拾遺和歌集』巻才三、夏歌、二〇四〉

崇徳院安芸

74二葉なる千とせをそふるもろかづらしめのうちにはためしにぞ引く

〈詞書〉

73の「返し」

〈『新拾遺和歌集』巻才三、夏歌、二〇五〉

行宗

75呉竹の雪うち拂ひけさみれば夜毎に君が千世ぞこもれる

〈詞書〉

「長承元年十二月廿四日雪朝、當斎院の御だいばん所へまゐらする、ゆき降りたる竹につけて」

〈『大蔵卿行宗卿集』新校群書類従11〉

清輔

76さかき葉のうつろふだにもうかりしをゆふばりなきここちこそすれ

〈詞書〉

「斎院いまだ本院にもいたりたまはざりけるとき、わづらひており給ひにけり、そののちほどなくかくれ給ひにければ、よみてかのおほぢのもとへ」

〈『清輔朝臣集』三三五〉

宣旨越後

77萬代もさしこめられし榊葉に心の雪は今もふりつつ

「長承二年十二月廿一日斎院ト定次日雪朝遣宣旨之許」の詞書をもつ行宗の「さしそむるはつ榊葉の白雪は千とせふるてふためしなりけり」の「返し」がこの歌

〈『大蔵卿行宗卿集』新校群書類従11〉

前斎院長官源有房

78いせしまやいそらが崎の朝霧にたななしをぶねこぎかくれつつ

〈詞書〉

「霧隔行舟と云ふ心をよめる」

〈『玄玉和歌集』巻才三、天地歌下、二四二〉

かの宮（斎院）の中将の君

79しめのうちは身をもくだかず桜花をしむこころを神にまかせて

〈詞書〉
「伊勢にはべりける比、別当実行公卿勅使にて大神宮へまゐられたりけるに、斎宮のくだらせ給ひしをり行事弁にて侍りけるが、事はてて京へかへるとて宮にまゐりて、日来になれてまかりかへるこそ心ぼそくさぶらへ、かやうにまゐらむ事もありがたく、もしいのちさぶらはば公卿になりて勅使にてくだらむ時ぞかやうにもまゐるべきと申してのぼりけるに、十年ばかりありて勅使にてくだられたりけるが、むかしのあらましごと忘れずはかならずまゐらむずらむとまたれけるに、まゐらで過ぎられければおひてつかはさんとて、そのころの歌めしければふたつをよみてまゐらせたりけるを、これをつかはしたりける」
〈『散木奇歌集』才九、雑部上、一三九八〉

66 思へただたけの都はかすみつつしめのほかなるみよのけしきを　俊頼

〈詞書〉
「伊勢にはべりけるころ、正月廿八日に斎宮おりさせ給ひぬと聞きてむろ山の入道がもとより送りてはべりける」の詞書につづく「故郷となりぬる宮のゆふがすみ思ひかけずやたちかはるらん」の「かへし」がこの歌
〈『散木奇歌集』才九、雑部上、一三二九〉

67 わかれゆく都のかたの恋しきにいざむすびみむ忘井の水　斎宮甲斐

〈詞書〉
「天仁(永)元年斎宮の群行のとき、わすれ井といふ所にてよめる」
〈『千載和歌集』巻才八、羈旅歌、五〇七〉

68 かへさじとかねてしりにきからころもこひしかるべきわが身ならねば　前斎宮内侍

〈詞書〉
「前斎宮いせにおわしける時、寮頭保俊みまつりほどとのゐもののれうにきぬをかりて、ほどすぎてかへさざりけるをと申したりける返事にいひつかはしける」
〈『金葉和歌集』巻才九、雑部上、五四九〉

69 けふよりはあらぶる神もあらじかしみそぎ河にてみそぎしつれば　読人不知

〈詞書〉
「みそぎ川、近江／永久四年十月斎宮宣旨家名所歌合、みそぎ川」
〈『夫木和歌抄』巻才二十四、雑部六、一一二六九〉

70 ありすがはおなじながれとおもへども昔のかげの見えばこそあらめ　中院(源雅定)入道右大臣

〈詞書〉
「土御門前斎院かくれ給ひて、ほどへてかの院にまゐりて侍りけるに、堀河院前斎院あひつぎてすみ給ひければ、なに事もかはらぬさまには侍れど、昔おもいでられ侍りければ、女房のもとへいひつかはしける」
〈『続詞花和歌集』巻才九、哀傷、四三六〉

71 昨日までみたらし河にせしみそぎしがのうら浪たちぞかはれる　八条前(藤原実行)太政大臣

〈詞書〉
「上西門院賀茂のいつきと申しけるを、かはらせ給うてからさきにはらへし

57くもりなく万づ代ぞ経むわが君はあまてらします神につかへて　頼綱

〈『（媞子内親王家）歌合』永保三年十月　日祝　左勝　一〉

58あきの野のはぎのにしきをきてみれば袖うちふらんみちだにもなし　大蔵卿匡房

〈詞書〉

「斎宮の野宮にて人人はぎの歌よみ侍りけるに」

〈『続詞花和歌集』巻才五、秋下、二二〇〉

59はやくよりたのみわたりしすずか川おもふことなるおとぞきこゆる　六條右大臣北方（源顕房）

〈詞書〉

「郁芳門院いせにおはしましけるころあからさまにくだりけるに、すずかがはをわたりけるによめる」

〈『金葉和歌集（三奏本、二度本）』巻才九、雑部上、五四〇〉

60いそぐともけふはとまらむたびねするあしのかりいほに紅葉ちりけり　権中納言通俊

〈詞書〉

「斎宮群行のすずかの頓宮にて、旅歌よみ侍けるに」

〈『新勅撰和歌集』巻才八、羈旅歌、五一七〉

61榊葉のときはならひに桜花しめの内にはちらさずもがな　二条太皇太后大弐

〈詞書〉

「本院にて、花盛に」

〈『二条太皇太后宮大弐集』新校群書類従12〉

62定めなき秋の野風になびきつつかたみにまねく花すすきかな　前斎院尾張

〈詞書〉

「野花随風といへることをよみける」

〈『続詞花和歌集』巻才五、秋下、二三三〉

63ちはやぶるいつきの宮のありす川松とともにぞかげはすむべき　京極前太政大臣（藤原師実）

〈詞書〉

「二条太皇大后宮、賀茂のいつきと申しける時、本院にて松枝映水といへる心をよみ侍りける」

〈『千載和歌集』巻才十、賀歌、六一六〉

64おいてこそいとどわかれはかなしけれ又あひみむといふべくもなし　権僧正（永縁）

〈詞書〉

「斎宮群行にいもうとのまゐりけるにおくりける」

〈『樹葉和歌集』巻才九、餞別付羈旅、六二〇〉

65むかしせしあらましごとのかはらぬをうれしと見えばいはましものを　媞子内親王

「〔永承三年〕春鷹司殿倫子百和香歌合　桃」　〈『平安朝歌合大成』㈡〉

中務

49ひまもなくすみれぞさけるしめの中はにはむらさきに見え渡るかな

〈詞書〉

「禖子内親王家庚申夜歌合　九番　堇菜　左」

〈『禖子内親王家歌合庚申』十七〉

（斎院次官）源　頼資

50神山（かみやま）の蔭（かげ）かる今日は涼しきか注連（しめ）のほかなる人に問はばや

〈詞書〉

「〔永承元年～康平三年〕夏　頼資　資成歌合　納涼」

〈『平安朝歌合大成』㈣〉

禖子内親王

51神がきにかかるとならばあさがほのゆふかくるまでにほはざらめや

〈詞書〉

「かものいつきときこえけるころ、本院のすいがきに、あさがほのさきかかりけるをみて」

〈『後葉和歌集』巻才四、秋上、一六六〉

前斎院（宮）河内

52なつかしき花たち花のにほふかな思ひよそふる袖はなけれど

〈詞書〉

「百首歌中によめる」

〈『後葉和歌集』巻才三、夏、九八〉

前斎宮筑前乳母

53春ごとにあかぬにほひをさくらばないかなるかぜのをしまざるらむ

〈詞書〉

「堀河院御時女御殿女房たちあまたぐして花見ありきけるによめる」

〈『金葉和歌集（二度本）』巻才一、春部、五十三〉

堀河院中宮上総

54声たえず秋のよすがら鳴く虫は浅茅が露ぞ涙なりける

〈詞書〉

「瞻西上人歌合に」

〈『新拾遺和歌集』巻才四、秋歌上、三六八〉

（篤子内親王）堀川中宮

55さきぬればよそにこそみれ菊の花天つ雲ゐの星にまがへて

〈詞書〉

「黒戸のまへに菊をうゑられたりけるを」

〈『新拾遺和歌集』巻才五、秋歌下、五一九〉

（媞子内親王）郁芳門院

56月かげにさそはれぬべき君ならば心づくしにまたれざらまし

〈詞書〉

「久我におはしましける比、月のあかかりける夜、六条右大臣室いかにせんゆきもやられであくがるる心のかぎりさそへ月かげとよみてたてまつりける御返事」

〈『玉葉和歌集』巻才十四、雑一、一九九〇〉

40いろさむみ枝にも葉にも霜ふりて在明の月をてらす白菊　権大納言長家

〈詞書〉
「後一条院御時、中宮斎院に行啓侍りけるに、庚申の夜、月照残菊といへる心をよみ侍りける」
〈『続後撰和歌集』巻才八、冬歌、四七九〉

41ふりすてて雲井はるかにすずか山かからんものと思ひかけきや　弁乳母

〈詞書〉
「斎宮くだらせたまひしに」
〈『弁乳母集』六三〉

42としをへてかけしあふひはかはらねどけふのかざしはめづらしきかな　大蔵卿長房

〈詞書〉
「斎宮長官にて侍りけるが、少将になりて賀茂まつりのつかひして侍りけるを、めづらしきよし人のいはせて侍りければよめる」
〈『詞花和歌集』巻才二、夏、五十三〉

43きかばやなそのかみ山のほととぎすありしむかしのおなじこゑかと　皇后宮美作

〈詞書〉
「禖子内親王かものいつきときこえける時、女房にて侍けるを、としへて後三条院の御時斎院にはべりける人のもとにむかしをおもひいでて、まつりのかへさの日かむだちにつかはしける」〈『後拾遺和歌集』才三、夏、一八三〉

44ゆふしでていはふいつきのみやびとは世世にかれせぬさか木をぞとる　禖子内親王家宣旨

〈詞書〉
「庚申の夜、みかぐらのついでに、女房歌合し侍りけるに」
〈『新勅撰和歌集』巻才九、神祇歌、五四七〉

45はるあきもしられざりけりさかきばのいろもかはらでしげるよどのは　武蔵

〈詞書〉
「六条斎院歌合」
〈『夫木和歌抄』巻二十二、雑部四、九六八九〉

46しめのうちの雪はやまともつもらなむきえぬためしに人のひくべく　弁

〈詞書〉
「永承四年十二月二日庚申夜　於本院御神楽次行之十番　雪　右」
〈『六条斎院歌合永承三年』六〉

47としふれどいろもかはらぬさかきばをのどかにさしていのるきみがよ　さがみ

〈詞書〉
「夏題　さかき」
〈『六条斎院歌合永承三年』三〉

48君が代にいくたび折らむ三千歳の春を数へて咲く桃の花　斎院出羽

〈詞書〉

33ごふつくすみたらし河のかめなればのりのうききにあはぬなりけり　〈選子内親王〉斎院

〈詞書〉
「女院御八講捧物にかねしてかめのかたをつくりてよみ侍りける」
〈『拾遺和歌集』巻才二十、哀傷、一三三七〉

34かきくらしあめふるよはやいかならん月とゆきとはかひなかりけり　藤原兼房朝臣

〈詞書〉
「選子内親王いつきにおはしましける時、雪のふりたりけるに月のあかかりけるよまゐりたりけれど、女房たちねたりけるにや月もみざりければ殿上のみすにむすびつけけるうた」
〈『金葉和歌集』巻才四、冬部、二九三〉

35かは神もあらはれてなるみたらしに思はむ事をみなみそぎせよ　右近

〈詞書〉
「四月、みそぎのよ、かはらにて神のいたうなりければ、右近の君ののりたるくるまにいひやる」進の「つねよりもみそぎを神のうくればやなりぬつら（ママ）のそらにみゆらむ」につづく右近の歌
〈『大斎院前の御集』七十二〉

36すまひぐさあめにうたれていとどしくかずをく露にぬれやますらむ　みぶ

〈詞書〉
「あせ殿ににはかにまかでてあるに、あめのいみじうふりてわりなきをおもふに、すまひぐさのよもぎの中にありけるをとらせて」さいさうの歌「しらつゆのかかる野なかにすまひ草あめにみだれてうなだれにけり」につづく歌
〈『大斎院前の御集』下巻、二六六〉

37もえはつるけぶりをしらでかまどやまよその空なるくもとみるらん　赤染衛門

〈詞書〉
「前斎院の御さうそうに、その夜、つくしへくだりにし御めのとのむまごはしらじかしと思ひしにあはれにて、そのひとをしりたる人にやりし」
〈『赤染衛門集』五八四〉

38をみなへししめのうちにはみだるともこたびおかむつゆはあらじな　中将

〈詞書〉
前に「おまへにをみなへしうつさせたまて、それにつけて、みつきよの中将に」と詞書ある「しめのうちにうつすこころあり女郎花あかのあだなは露もおかるな」の「返し中将」とある
〈『大斎院御集』一一一〉

39さか月にさやけきかげのみえぬればちりのおそりはあらじとをしれ　（媞子女王）

〈詞書〉
「長元四年六月十七日に伊せのいつきの内の宮にまゐりてはべりけるにはかにあめふりかぜふきていつきみづから託宣して祭主輔親をめしておほやけの御ことなどおほせられけるついでに、たびたび御みきめしてかはらけたまはすとてよませたまへる」
〈『後拾遺和歌集』才二十、雑六、神祇、一一六〇〉

〈詞書〉
「一品宮より、伊勢の御くだりに」　〈『斎宮女御集』七十四〉

26帰りこむ程をもしらずかなしきはよをなが月の別れなりけり　藤原　道経

〈詞書〉
「斎宮のくだり侍りけるに、ともにまかりける女にいひつかはしける」　〈『後葉和歌集』巻才八、別、二五四〉

27あだに見しにはのさくらはちらずしてしめのさかきの色かへてけり　大中臣輔親

〈詞書〉
「さい宮のおりゐ給へるふる宮所のいとあはれにあれて、人かげもみえぬを、入りてみれば、三月十日ばかり、さくらいとおもしろし、はやうさせりけるさかきのかれたるをみて」　〈『輔親集』二一〇〉

28年ふれどかはらぬものはそのかみに祈りかけてしあふひ成けり　藤原　公任

〈詞書〉
「斎院にてもの申しける人、内わたりにまいれる(る)よしききて、あふひにつけてつかはしける」　〈『公任集』五四九（『平安私家集』）〉

29心のみとまりしのべのたよりにもまつとはいはでなどすぐしけん　円融院御製

〈詞書〉
「位さらせ給て、むらさき野に子日せさせ給けるに、御せうそこもなくて過ぎさせ給ひにけるを、又の日、斎院より、野べながらひく松かずにあらぬ身はすぎしねのびをわすれやはすると侍りける御返事に」　〈『玉葉和歌集』巻才十四、雑歌一、一八三二〉

30あまの河あけゆく程の露けさにいづくも同じ空を詠めて　藤原　道長

〈詞書〉
「七月八日、まだつとめて、斎院より、りうたんの露いみじうおきたるに、まだ御とのこもりたるほどに」の詞書をもつ「露おきてながむる程を思ひやれあまのかはらの暁の空」（十八）の「御返事」としてこの歌がある　〈『御堂関白集』十九〉

31昨日今日ゆきあふ人はおほかれどみまくほしきは君ひとりかな　和泉式部

〈詞書〉
「祭のかへさみるに、斎院の御車のうちに、しりたる人のもとに、葵にかきて」　〈『和泉式部続集』一八〇〉

32ちはやぶるいつきの宮のたびねにはあふひぞ草の枕なりけり　藤原実方朝臣

〈詞書〉
「まつりのつかひにて、神だちの宿所より斎院の女房につかはしける」　〈『千載和歌集』巻才十六、雑歌上、九七〇〉

18しののめのあくまでと思ふことの手に覚束なくも惑はるる哉　源　兼澄

〈詞書〉

「斎宮のかん神したまひしにあかつきにきんのこゑのはつかなりしがまたもきこえざりしを心もとなしとおもひし程にさけいださせ給ひたるかはらけとりて」

〈『源　兼澄集』新校群書類従11〉

19くさも木もおもふことあらじよろづよはきみがあふぎの風になれきて　大中臣能宣

〈詞書〉

「斎宮より、うちに御あふぎたてまつりたまふに、かくべき歌とめせば」

〈『能宣集』四巻、三三二〉

20しらくものゆきかくるてふすずかやまとほくなるともおとはせよきみ　れいのおきな（源重文）

〈詞書〉

「斎宮の内侍に、びはどのいろいろのものおくりたまふに」

〈『重之集』一五八〉

21万代と天の空まできこゆるは夜ぶかきまつのしらべなりけり　平　兼盛

〈詞書〉

「さい宮のみやにてかんしたまひしに」

〈『兼盛集』八十〉

22秋の日のあやしきほどのゆふぐれにをぎふくかぜのおとぞきこゆる　徽子女王

〈詞書〉

「うへ、ひさしうわたらせ給はぬ秋のゆふぐれに、きむをいとをかしうひき給ふに、上、しろき御ぞのなえたるをたてまつりて、いそぎわたらせ給ひて、御かたはらにゐさせ給へど、人のおはするともみいれさせたまはぬけしきにてひき給ふをきこしめせば」

〈『斎宮女御集』十五〉

23すずかやましづのをだまきもろともにふるにはまさることなかりけり　規子内親王

〈詞書〉

「もろともにくだり給ふ、すずかやまにて」の詞書につづく徽子女王の「よにふれば又もこえけりすずか山むかしのいまになるにやあるらん」（二六二）に対する「みやの御かへり」がこの歌

〈『斎宮女御集』二六三〉

24神のます山田の原のつるのこはかへるよりこそ千代はかぞへめ　源　順

〈詞書〉

「伊勢規子斎内親王の群行ののち、かへるあしたに、斎王の御前にて饗禄等たまふに、男女うたよむにたてまつる」

〈『順　集』二七二〉

25わかれゆくほどはくもゐをへだつともおもふこころはきりもさはらじ　（資子内親王）

9春ごとに行きてのみみむ年ぎりもせずといふたねはおひぬとかきく
〈詞書〉
「かの女御左のおほいまうちぎみにあひにけりとききてつかはしける」
〈『後撰和歌集』巻第十五、雑歌一、一一一〇〉
斎宮のみこ（柔子内親王）

10梅の花春よりさきにさきしかど見る人まれに雪のふりつつ
〈詞書〉
「ももぞのの斎院の屏風に」　〈『拾遺和歌集』巻才十五、恋五、一〇〇七〉
よみ人しらず

11白妙のいもが衣にむめの花色をもかをもわきぞかねつる
〈詞書〉
「ももぞのにすみ侍りける前斎院屏風に」
〈『拾遺和歌集』巻才一、春、一七〉
つらゆき

12をらざりし時よりにほふ花なればわがためふかき色とやはみる
〈詞書〉
「返し」（敦忠の返歌）　〈『玉葉和歌集』巻才十二、恋歌四、一六一三〉
雅子内親王

13なみながらそでぞぬれぬる海人小舟のりおくれたるわが身とおもへば
〈詞書〉
「あま」　〈『古今和歌六帖』才二、一四五〇〉
さいい院（婉子内親王）

14思ふ事なるといふなるすずか山こえてうれしきさかひとぞきく
〈詞書〉
「天暦十一年九月十五日斎宮くだり侍りけるに、内よりすずりてうじてたまはすとて」
〈『拾遺和歌集』巻才八、雑上、四九四〉
御製（村上天皇）

15よろづ世の始とけふをいのりおきて今行末は神ぞしるらん
〈詞書〉
「天暦御時、斎宮くだり侍りける時の長奉送使にてまかりかへらむとて」
〈『拾遺和歌集』巻才五、賀、二六三〉
中納言朝忠

16かめのうへのやまをたづねし人よりもそらにこふらむきみをこそおもへ
〈詞書〉
「堀河中宮おはしまさでのち、円融院にまうされける」
〈『続古今和歌集』巻才十六、哀傷歌、一四六三〉
二品尊子内親王

17ちはやぶるいつきの宮の庭の松いくらの千代をとどめかぞへん
〈詞書〉
「天徳二年二月五日、一条太政大臣斎院にて子日し侍りしに、庭の松をもてあそぶと云ふ題にて」
〈『元輔集』三十六〉
清原元輔

大伯皇女

1わがせこをやまとへやるとさよふけてあかときつゆにわがたちぬれし

〈詞書〉

「大津皇子竊下二於伊勢神宮一上来時大伯皇女御作歌二首」

〈『万葉集』巻第二、相聞、一〇五〉

あま敬信

2おほぞらをてりゆく月しきよければ雲かくせどもひかりけなくに

〈詞書〉

「田むらのみかどの御時に、斎院に侍りけるあきらけいこのみこを、ははあやまちありといひて、斎院をかへられむとしけるを、そのことやみにければよめる」

〈『古今和歌集』巻第十七、雑歌上、八八五〉

京子

よみ人しらず（恬子内親王）

3きみやこし我や行きけむおもほえず夢かうつつかねてかさめてか

〈詞書〉

「業平朝臣の伊勢のくににまかりたりける時、斎宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける」

〈『古今和歌集』巻第十三、恋歌三、六四五〉

所

亭子院御歌（宇多天皇）

4ゆきて見ぬ人のためにとおもはずはたれかをらましにはのしらぎく

〈詞書〉

「君子内親王賀茂のいつきにおはしましける時、菊花に付けてたてまつらせ給ひける」

〈『続古今和歌集』巻第五、秋歌下、四九六〉

君子内親王

5我やどにいろ（を）おりとむる君なくばよそにもきくの花をみましや

〈詞書〉

「斎院の御かへし」（亭子院御歌四九六の返歌）〈『大和物語』四十九段〉

（凡河内躬恒）

6おとにきくいせのすずかのやまかはのはやくよりわがこひわたるきみ

「すずかやま」と題されたこの歌（一五七）につづいて「まとかた」「あじろのはま」「うはせがは」「はりかは」「たけかは」「わたらい」「みつ」「うきしま」「ながはま」（一五八～一六六）とあり、最後に「此十首は、延喜十六年四月廿二日、わたくしごとにつきていせのさい宮にまかりたるとき、すなわち寮頭国中をつかひにて、くにぐにの所所なを題してよませたまふ野望歌等」とある

〈『躬恒集』一五七〉

（藤原兼輔）

7呉竹のよよの都と聞くからに君は千歳の疑ひも無し

「伊勢の国に前斎宮のおはしましける時に、堤中納言勅使にて下り給ひて」「おほむ返しは聞かず　かの斎宮のおはします所は「たけの宮」となむ言ひける」

〈『大和物語』三十六段〉

（斎宮の内侍）

8人はかる心のくまはきたなくて清きなぎさにいかでゆきけん

〈詞書〉

「いせの斎宮にまゐりてかへるころはやうしりたる女のもとより」

「この女は斎宮のないしといふなり」

〈『兼輔集』七十五〉

「斎宮斎院百人一首」稿

所　京子

A Manuscript of one hundred SELECTED famous poems (WAKA) by the Imperial Princesses devoted TO ISE shrine (SAIGŪ), KAMO shrine (SAIIN) and their Relatives.

Kyoko Tokoro

Received Apr. 17, 1995

キーワード　伊勢斎宮・賀茂斎院・百人一首

Key Words : Ise-Saigū, Kamo-Saiin, One hundred famous poems (WAKA)

〔解題〕

周知のごとく「小倉百人一首」は、鎌倉時代に藤原定家が撰んだとされているが、江戸時代以降、これに倣った各種の〝百人一首〟が作られてきた。そこで、私も先人にあやかって、伊勢神宮に仕えた斎宮と賀茂大社に仕えた斎院と各々の関係者たちの中から、百人の詠んだ和歌百首を選んでみた。

ちなみに、拙著『斎王和歌文学の史的研究』（平成元年、国書刊行会刊）では、斎宮関係の和歌三九五首、斎院関係の和歌一、二一〇首を集成した。今回は、それをベースにしながら、あらためて勅撰集・私撰集・私家集などの中から関係者の和歌を拾い集め、次のような点に留意しながら、一人一首に限り百首を選んだのである。

一、単に斎宮・斎院といえば斎王自身を指すが、ここではそれだけでなく、伊勢斎宮と賀茂斎院にかかわりのあった人物のうち、百人の詠んだ和歌を百首集成した。

二、百首の選択にあたっては、和歌の巧拙よりも、その詞書および内容から斎宮・斎院および関係者の在任中・退下後における状況を理解するに資するものを巾広く採ることに努めた。

三、したがって、一人で何首もよいものがある場合は、続稿の評釈篇において可能な限り紹介する。

四、百首は、「小倉百人一首」にならって、ほぼ時代順に掲げ、そのあとに詞書などを書き加え、末尾に出典を注記した。

五、和歌・詞書などは、原則として『新編国歌大観』から引用し、同書未収のものは『新校群書類従』『平安朝歌合大成』などに拠った。

こうして集成した百首の内訳は、伊勢斎王自身の和歌十三首、賀茂斎王自身の和歌七首、それ以外の関係者の和歌八十首（男性四十二首、女性三十六首、不明二首）である。

〈平成七年四月十七日受理〉